「職業と人文学」の企画運営におけるメディアセンターとの共働作業について

宇都宮大学留学生・国際交流センター　准教授　湯本　浩之*1

１．はじめに

本稿は、2012 年度で開講６年目を迎えた文学部基幹科目Ａ「職業と人文学」の企画運営におけるメディアセンターとの共働作業の概要について、この授業を担当した教員の一人として報告するものである。特に、2012 年度からは、本授業を２クラスに分割した上で、建物の異なる２つの教室で「同時中継」式の授業を実施することになり、両教室を結ぶ回線の調整や各種機材の設営など､メディアセンターとの共働作業を経験することとなった。そうした経験を共有することで、今後の参考に資することができれば幸いである。

２．文学部基幹科目「職業と人文学」について

１）授業の目的・趣旨

本科目は、2006 年度の文学部カリキュラムの改編に伴い、キャリア教育の一翼を担うことを目的に、２年次後期の必修科目として開講され、現在に至っている。そのねらいは、文学部の学生が自分自身と人文学との関わりあいを問う中で、人文学を学ぶ意味や価値を改めて見いだし、それらを自身の今後の人生設計や職業選択に繋げて考えていく機会を提供することであるとした。また、本科目開講の趣旨は、学生たちに、今後の就職活動を有利に運ぶための情報やノウハウをはじめ、講師として招請した人物の生き方や仕事ぶりを手本やモデルとして提供しようとするものではなく、学生たちが今後の人生や進路を照らす指針や目標を自ら獲得していけるよう、自分自身と向き合いながら仕事や人生について考えていく上での視点や材料を提供しようとするものであるとしている。

そのため、本科目では毎年、多様な職域から招請されたゲスト講師らが、学生たちに示唆や刺激に富んだ貴重な講話を提供している。2012 年度の講師の顔ぶれは、「表１」にある通り、会社員や起業家をはじめ、編集者やテレビ・プロデューサー、地方公務員や大学職員、そして高校の教員やチャプレンなどである。一見すると共通点のないように見える講師陣ではあるが、講師の人選に際しては、起業家や編集者のように個人の力量が直接的に問われる職種と、公務員や大学職員のように大きな組織の中で役割を果たしていく職種とを対比させ、そこに求められる資質や能力の違いを際立たせてみようと試みている。学生たちには、こうした講師陣の多様な職種や職歴に触れながら、「働くこと」や「生きていくこと」の意味や現実に気づいていくことを期待し、多くの学生がその期待に応えてくれたものと自己評価している。*2

２）授業運営上の問題の改善

しかしながら、この授業の運営に関しては、2007 年度の開講以来、次のような問題に直面していた。すなわち、端的に言えば、この科目を文学部２年生の必修科目としたため、履修者数が再履修者を含めると毎年 900 名を越え、本学ではほかに例を見ない“マンモス授業”となったことである。2011 年度までは、タッカーホールの２階と３階を教室として使用し、担当教員４名とティーチング・アシスタント 12 名が授業環境の保持に努めてきた。

（表 1）2012 年度「職業と人文学」の授業構成と各回の担当講師

第１回	オリエンテーション（文学部：加藤睦・湯本浩之）※
第２回	講師Ａ：黒崎一成（株式会社牧野フライス製作所） 講師Ｂ：北沢聡子（公益財団法人東京都歴史文化財団・東京芸術劇場）
第３回	講師Ａ：北沢聡子（公益財団法人東京都歴史文化財団・東京芸術劇場） 講師Ｂ：黒崎一成（株式会社牧野フライス製作所）
第４回	番組視聴「無縁社会：新たなつながりを求めて」（制作：ＮＨＫ）
第５回	講　師：板垣淑子（日本放送協会報道局）☆
第６回	講　師：加藤　睦（文学部）※
第７回	講師Ａ：須子喜彦（ＢＡＤＯ株式会社） 講師Ｂ：市原信太郎（立教池袋中学校・高等学校）
第８回	講師Ａ：田澤儀高（connection of the children 共同代表） 〃　　加藤功甫（connection of the children 共同代表） 講師Ｂ：須子喜彦（ＢＡＤＯ株式会社）
第９回	講師Ａ：市橋祐介（立教池袋中学校・高等学校） 講師Ｂ：田澤儀高（connection of the children） 加藤功甫（connection of the children）
第 10 回	講師Ａ：藤巻明（文学部）・沼尻晃伸（文学部）◎ 講師Ｂ：沼尻晃伸（文学部）・藤巻明（文学部）◎
第 11 回	講師Ａ：佐藤久恵（千代田区神保町出張所地域情報主査） 講師Ｂ：佐伯美佳（立教大学新座キャンパス事務部しょうがい学生支援室）
第 12 回	講師Ａ：板倉和世（立教大学新座キャンパス事務部学生課） 講師Ｂ：佐藤久恵（千代田区神保町出張所地域情報主査）
第 13 回	講師Ａ：原田英治（英治出版株式会社代表取締役） 講師Ｂ：伊藤　靖（株式会社リトルウイングス代表取締役）
第 14 回	講　師：小澤　実（文学部准教授）※

＜凡例＞

講師Ａ　11 号館 AB01 教室に登壇。

講師Ｂ　９号館大教室に登壇。

※　９号館大教室から 11 号館 AB01 教室へ音声・映像を同時配信。

☆　タッカーホールでのＡＢ両クラスの合同授業。

◎　両講師が前半と後半をそれぞれ担当。

しかし、やはり壇上の講師と学生たちとの物理的心理的な距離感はいかんともしがたく、講師との質疑応答や学生相互の議論を活発に行うことが難しい環境にあった。

そこで、2012 年度からは、その改善策として、履修者と受講会場をＡＢ２つのクラスに分割することとした。そして、Ａクラスは 11 号館の AB01 教室、Ｂクラスは９号館の大教室で授業を実施することとした。これにより、タッカーホールでの授業と比較すれば授業環境も改善され、“講師の顔が見える”授業を展開することができるようになった。

３）授業企画上の工夫

「職業と人文学」の授業内容を検討する企画会議は、毎年５月の連休明け頃から始まり、夏休み前までには各回の講師を確定するなど、企画の大枠が固まってくる。2012 年度は、教室を２ヶ所に分けることにしたため、いわば、10 数回に及ぶ２つの連続講演会が同時並行に進行するような授業運営を想定することになった。そのため、両教室での授業内容に差が生じないよう、講師は週を変えて両教室に登壇することを原則とした。しかし、授業回数には上限があり、特に、多忙な外部講師の日程を優先するとなると、外部講師の全員が両教室に１回ずつ登壇することは実現できなかった。

そのような制約がいくつかある中で、最終的には「表１」のような授業構成となり、初回のオリエンテーションのほか、本科目の担当教員の回（第６回と第 14 回）では、講師は片方の会場に登壇し、別会場へ講師の音声や映像を双方向で送受信することとした。たとえば、初回授業の「オリエンテーション」では、“マンモス授業”の円滑な運営のために、授業の目的や内容をはじめ、受講上のルールや手続きを学生には丁寧かつ厳重に説明する必要があった。そこで両会場での説明に齟齬や不足が生じないよう、担当教員は９号館に登壇して、その音声や映像を 11 号館に双方向で送信することにした。

この「同時中継」こそが、この授業の成立にとっては、最大の工夫が求められたところであり、いわば生命線となった。しかし、これを実現するためには、現行の付帯設備では幾多の技術的な制約があることが判明し、問題解決に向けた試行錯誤が続くこととなった。

３．メディアセンターとの共働作業について

当初、担当教員側は、一連の作業をメディアセンターに依頼すれば、簡単に「同時中継」ができるものと考えていたところがあった。しかし、夏休み前に９号館と 11 号館との同時中継による授業の可能性をメディアセンターに打診したところ、そうした授業は、本学ではこれまで前例のないことであり、技術的な難しさが感触として伝えられた。まさに「言うは易し、行うは難し」であったのだが、その後、付帯設備の機能が再確認され、実現の可能性が示唆された。しかし、そのためには実地の確認やリハーサルが必要だということになり、夏休み期間中に必要な作業を実施することとなった。ただし、９号館大教室の改装工事などが重なり、同時中継が実施可能であることを確認できたのは、後期が始まる直前であった。

このように担当教員側のいささか“安易”な発想から生まれた同時中継式の授業ではあったが、メディアセンターの多大な尽力のおかげで、この授業の実施に漕ぎ着けることができた。以下に、この授業の運営に際して、メディアセンターに協力を依頼した業務を列挙しておく。

①音声・映像の双方向通信

9 号館で授業を行っている時の講師の音声や映像を 11 号館に送信するとともに、11 号館との質疑応答のために、11 号館の音声や映像を 9 号館に逆送信するための回線や機材の設営を依頼した。

②授業風景等のビデオ撮影

この授業では、同時中継のための映像とは別に、内部記録用のためのビデオ撮影を行い、後者の撮影データを DVD ディスクに保存することとした。これらの作業についてもメディアセンターに依頼した。

③パソコンや視聴覚機材の設営

ほかの通常の授業と同様に、授業中に必要なパソコンや DVD 等の機材の設営を依頼したが、授業直前の機材の追加や変更に際しても、メディアセンターからは迅速かつ柔軟な対応を得ることができた。

④ティーチング・アシスタント（ＴＡ）への操作指導

この授業では、ＴＡを採用して授業運営への協力を仰いだが、両教室には機材担当のＴＡを２名ずつ配置し、ステージ上の操作卓等の操作について、メディアセンターの担当者から指導を仰いだ。

４．おわりに：メディアセンターとの共働作業をふりかえって

以上のように、文学部基幹科目である「職業と人文学」は、2012 年度からその運営形態を大きく変更することになったが、その授業運営にとって、メディアセンターとの事前協議に基づいた共働作業は不可欠なものであった。当初はその実現が難しいと思われた同時中継式の授業ではあったが、機材や回線などに関する技術的な困難を乗り越えて、当初の予定通りに授業を終えることができたことは、まずは何よりの大きな成果であった。こうした成果に結びついた要因を次の３つに整理してみたい。

まず一つ目は、メディアセンターとの事前協議を通じた意思の疎通である。この授業をどのように運営したいのかという担当教員側の要望と、現状の付帯設備の中で技術的にどこまで可能なのかという現実を突き合わせ、問題点や可能性を両者の間で共有することが重要だったと思われる。その共有の方法は、電子メール上でのやりとりが大部分ではあったが、時には現場でのリハーサルに担当教員も立ち会うなどして、情報の共有を図ることに努めた。

二つ目は、問題解決に向けたメディアセンター担当職員の柔軟かつ臨機応変な姿勢である。当初は実現が難しいとされた同時中継式の授業ではあったが、その実現に向けた担当職員の地道で、かつ専門的な作業なしには、この授業が成立することはなかったと言えよう。また、各回の授業開始前にも、機材や回線の最終的な微調整に余念がなく、万全を期するその姿勢には、担当教員として頭が下がる思いであった。

そして、三つ目は、メディアセンターと担当教員をつなぐ教務担当職員の存在である。

恥ずかしながら、メディアセンター側の諸事情を心得ていない担当教員側の意を汲んで、メディアセンターとの具体的な連絡調整に当たったのは、学部事務１課の担当職員であり、その果たした役割も強調しておきたい。

以上、メディアセンター、学部事務１課、そして担当教員という立場を異にする三者の共働作業の成果として、2012 年度の文学部基幹科目「職業と人文学」が実施できたことをご報告したい。

末筆ながら、メディアセンターならびに学部事務１課でこの授業をご担当いただいた皆様の多大なご理解とご協力に改めて厚く感謝申し上げるとともに、今年度以降の「職業と人文学」の企画運営や授業環境の改善に対しても、更なるご助言とご協力をお願いする次第である。

【註】

＊1　筆者は 2008 年度から５年間にわたって、文学部特任准教授（基幹科目担当）として本科目の企画運営に携わった。

＊2　「授業の目的・趣旨」に関しては、『2012 年度文学部基幹科目 A「職業と人文学」報告書』（立教大学文学部、2013 年）の「まえがき」から一部抜粋の上、加筆した。また、本科目の実施概要等に関しては、本報告書を参照されたい。